

高鍋町教育研究所

I	研究主題及び副題	11-1
II	主題設定の理由	11-1
III	研究の目標	11-1
IV	研究仮説	11-1
V	研究の全体構想	11-2
VI	研究組織	11-2
VII	研究の実際	11-3
1	防災教育の充実	11-3
(1)	高鍋町小・中学校の防災教育の手引き書作成	11-3
(2)	講師招聘による研修	11-4
2	防災学習の視点を取り入れた授業実践	11-5
(1)	小学校における実践（学級活動）高鍋東小学校4年生	11-5
(2)	中学校における実践（学級活動）高鍋西中学校2年生	11-6
3	防災訓練（避難訓練）等の充実	11-7
(1)	地震・津波を想定した防災訓練（避難訓練）等の現状	11-7
(2)	小・中学校等の連携	11-7
(3)	「学校防災の日」の設定	11-7
4	学習環境整備	11-8
(1)	広報活動「ふるさと学習通信」発行	11-8
(2)	「開こう！家族防災会議」資料	11-9
VIII	研究の成果と課題	11-10
1	研究の成果	11-10
2	今後の課題	11-10
	【引用・参考文献】	
	【研究同人】	

I 研究主題及び副題

地震・津波災害から命を守り、たくましく生きる児童生徒の育成
～防災教育の指導計画の充実を図り、主体的に行動する力を育てる指導を目指して～

II 主題設定の理由

平成23年3月11日に発生した東日本大震災では想定をはるかに超える津波が起こり、多くの命が奪われるなど甚大な災害となった。その中であって、「津波てんでんこ」の伝承や防災教育によって多くの子どもたちの命が救われた釜石市の事例は「釜石の奇跡」と呼ばれる貴重な教訓となった。

日向灘沿岸に位置する高鍋町にとっても、近い将来、南海トラフ地震による津波が高い確率で発生することが予想されており、災害から子どもたちの命を守る防災教育の取り組みを迫られている。本町は南海トラフ地震で町面積の15パーセントに当たる最大6.7平方キロが浸水すると想定されている。そのため、校舎の外壁落下防止の補強工事など施設面の整備を図ったり、町としての防災訓練を実施するとともに町内各戸に「みんなの防災手帳」を配布して災害対策を進めたりしている。特に「津波浸水想定への対策」として「津波避難ビル」の拡充を図っている。

各学校では、これまで「危機管理体制の整備」、「災害発生時の危機管理対応」など実効性のある防災マニュアルを作成・見直しを進めてきた。さらに、マニュアルに基づいた防災訓練や研修等を繰り返し行い、評価の中から改善のための整備をしてきた。

児童生徒には「状況に応じて自ら考え、判断し、主体的に行動する力」を育てることを目指して指導に当たってきた。

また、児童生徒が家庭や地域で被災することも想定し、「家族と避難行動や避難場所について話し合う。」ことを家庭に呼びかけ、一人一人の児童生徒の防災意識を高めることも課題としてきた。

本研究所では、平成25年度から町内小・中学校の防災教育の充実を図るための研究に取り組んだ。各学校作成の防災マニュアルを突き合わせて対照し、研究授業による検証を繰り返しながら、防災教育の全体計画や年間指導計画作成の準備を進め、防災教育の授業で使えるデジタルコンテンツなどの作成を進めた。

また、町内の各学校の抽出した児童生徒・保護者及び教職員に、防災に関わるアンケート調査を実施することで、より実態に即した研究内容とすることができた。

平成26年度は、これらの研究の成果が各学校の教育課程の中に組み込まれ、実践に結び付く内容になるように、「高鍋町小・中学校の防災教育の手引き書」の作成・実践に努め、一人一人の児童生徒の意識や行動を変えることができるような研究を推進するために、「地震・津波災害から命を守り、たくましく生きる児童生徒の育成」を本主題に「防災教育の指導計画の充実を図り、主体的に行動する力を育てる指導を目指して」を副題に設定した。

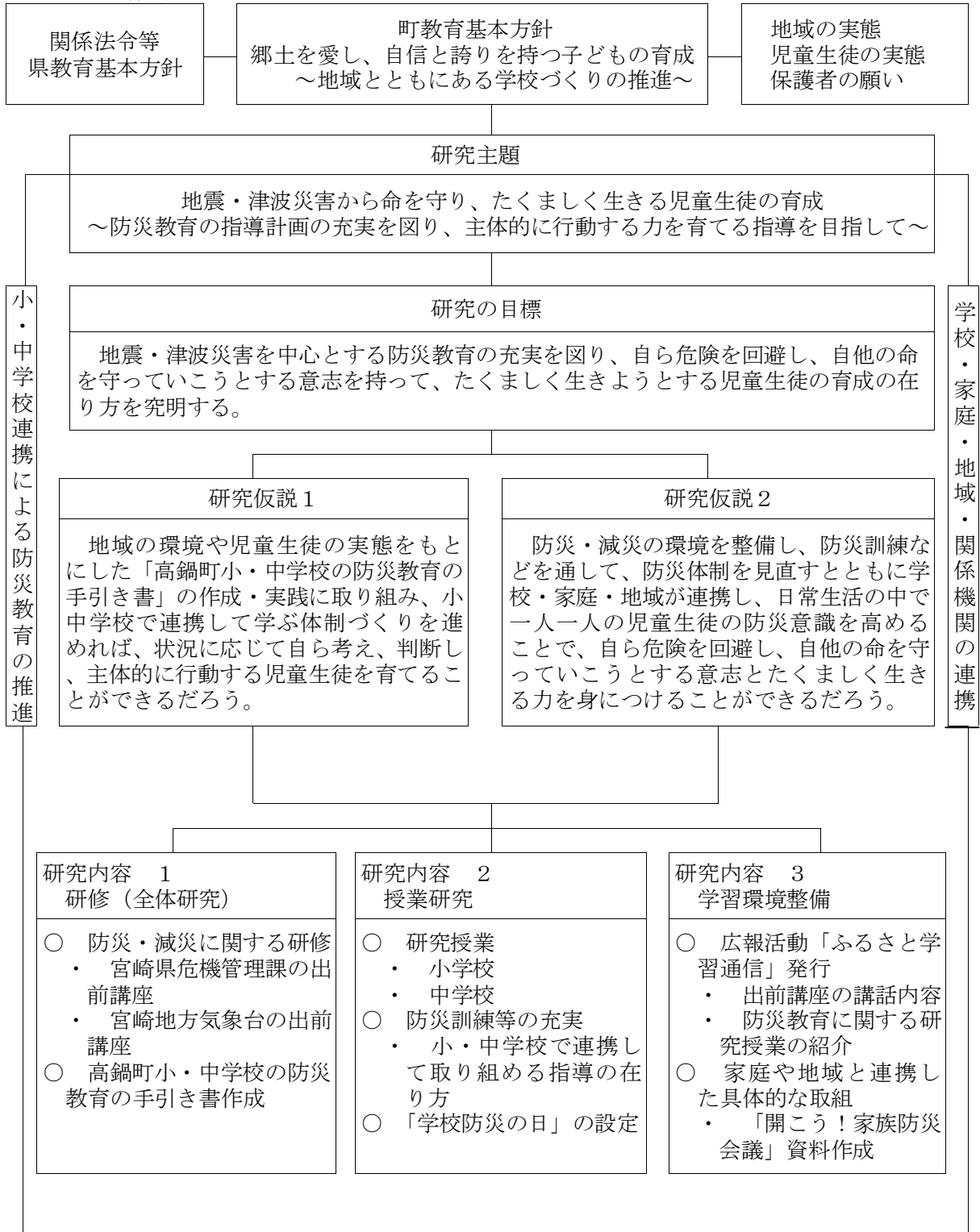
III 研究の目標

地震・津波災害を中心とする防災教育の充実を図り、自ら危険を回避し、自他の命を守っていこうとする意志を持って、たくましく生きようとする児童生徒の育成の在り方を究明する。

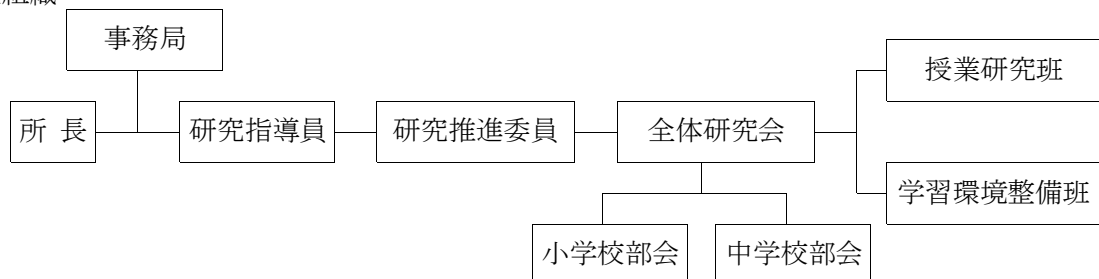
IV 研究仮説

- 1 地域の環境や児童生徒の実態をもとにした「高鍋町小・中学校の防災教育の手引き書」の作成・実践に取り組み、小・中学校で連携して学ぶ体制づくりを進めれば、状況に応じて自ら考え、判断し、主体的に行動する児童生徒を育てることができるだろう。
- 2 防災・減災のために環境を整備し、防災訓練等を通して防災体制を見直すとともに学校・家庭・地域が連携し日常生活の中で一人一人の児童生徒の防災意識を高めることで、自ら危険を回避し、自他の命を守っていこうとする意志とたくましく生きる力を身につけることができるだろう。

V 研究の全体構想



VI 研究組織



VII 研究の実際

1 防災教育の充実

(1) 高鍋町小・中学校の防災教育の手引き書作成

ア 防災教育の全体構想

- 平成25年度の研究では、副題に「状況に応じて自ら考え、判断し、主体的に行動する力を育てる指導を目指して」を掲げ、防災教育の全体計画の中で、「防災教育の基本的な考え方」を示して、次のような「目指す子ども像」を設けた。

目指す子ども像

- 1 自分の命は自分で守ることができる子ども
- 2 自ら安全な所へ避難するとともに、他の人も誘うことができる子ども
- 3 地域の安全・防災のために行動ができる子ども

また、「防災教育により育む能力は何か。」について協議し、小・中学校の各学年段階に合わせて「防災教育重点目標」を示して、防災教育と教育活動の関係を明らかにしてきた。

- 平成26年度の研究では、副題に「防災教育の指導計画の充実を図り、主体的に行動する力を育てる指導を目指して」を掲げ、これまでの研究内容をもとに、「教育活動における防災教育の機会」を見直し、指導内容の重点化を図るために、防災学習の3つの視点として「知 防災の正しい知識」「技 災害から身を守る技能」「心 自助・共助の態度」を設けて、防災教育の全体構想図を作成した。

イ 防災教育の年間指導計画

- 年間指導計画の作成の仕方は、各学校に準備されていた簡単な防災教育の年間指導計画を参考に、学習指導要領によって主な防災教育の内容を整理した。

内容によっては、実施時期の異なりを配慮したり、地震・津波災害を中心としながらも教科等では他の自然災害にも一部にふれたりした。

- 各教科

関連的教科（生活、理科、社会、体育、保健体育、家庭、技術家庭）の指導内容を中心にし、その他の教科（国語、算数・数学、音楽、図画工作、美術、外国語活動、外国語）は、指導内容の工夫や方法によって選んだ。

- 道徳

各学校の道徳年間指導計画の主題名や資料名を検討し、学習内容を考えて防災教育の指導計画を作成し、各学年1単位時間分の指導例を作成した。

- 特別活動

各学校の避難訓練等の事前指導から事後指導に関する内容をもとに、学級活動を中心に指導計画を作成した。学校生活の中で被災場面を想定したり、家庭や地域での被災場面を想定したりして指導例を作成した。

- 総合的な学習の時間

防災マップ作りや図上訓練を通して、児童生徒の意識啓発につながる内容を指導計画に入れた。

ウ 高鍋町の防災教育に関する資料

○ 宮崎県の地震・津波の記録

宮崎地方気象台のホームページをもとに、1931年（昭和6年）までさかのぼり、記録の一部を「発生年月日」「震源」「マグニチュード」「主な被害」でまとめた。高鍋町の被災に関する記述に着目した。

○ 高鍋町の地震・津波の防災対策

高鍋町では、「ひと目でわかる高鍋町標高マップ」「津波浸水深」「津波避難ビル位置図」をホームページにまとめている。高鍋町の地形や浸水想定地域について、教職員の理解を深め、児童生徒の指導に生かしてもらうための資料とした。昨年度、中学校の授業で「津波避難ビル位置図」を活用した。

○ 標識に関する資料

標識の目的や意味を理解させる指導が必要である。また、「津波避難場所」や「津波避難ビル」などの標識の設置場所を確かめさせたいと考え資料とした。

○ 「学校の防災の日」に関する資料

町内小・中学校で「学校防災の日」を設定し、その日に関する教職員による児童生徒への講話資料を準備した。内容は主に「どんな日」「どんな災害」「知らせたいこと」についてまとめた。

○ 地震・津波災害の教訓

「釜石の奇跡」により「津波避難の3原則」「想定を信じるな、最善をつくせ、率先避難者たれ」の意味や考え方をとらえさせたり、「津波てんでんこ」により、「てんでんこ」の背景にある意味を考えさせたりするための資料とした。

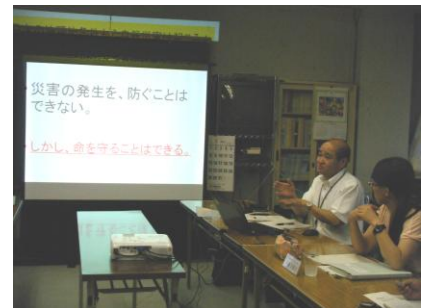
(2) 講師招聘による研修

ア 宮崎県危機管理課 出前講座

宮崎県の防災の取組について、研究員自身の理解を深めるとともに、災害の対策や県・町の関係機関との連携の在り方を学ぶ為に、宮崎県危機管理課より講師を招いて研修を行った。以下の講話内容及び協議で研修を深めることができた。

- ・ 防災教育について
- ・ 宮崎県の防災推進施策について
- ・ 「釜石市津波防災教育のための手引き」について

地震・津波の仕組み、全国や宮崎県の防災に関する取組等について情報を交換することもでき、それ以降の研究推進や研究授業の構想に役立てることができた。



イ 宮崎地方気象台 出前講座

高鍋町が直面している課題である「地震・津波」について、高鍋町内小・中学校教職員の理解を深めるとともに指導の充実を図り、本町の防災教育の振興を期する為に、宮崎地方気象台より講師を招いて研修を行った。以下の講話内容によって研修を深めることができた。

- ・ 地震、津波の仕組みについて
- ・ 南海トラフ巨大地震の被害想定について
- ・ 緊急地震速報について
- ・ 学校での防災訓練等の取組について



2 防災学習の視点を取り入れた授業実践

(1) 小学校における実践（学級活動） 高鍋東小学校 4年生

ア 題材名 休み時間に大地震がおきたら

イ 本時のねらい

- 地震発生時の身の守り方を知ることができる。
- 地震発生時に教室以外の場所で、安全に適切な避難行動をとることができる。

ウ 防災学習の視点

- 東日本大震災を参考にし、地震はいつ発生するか分からないことに気付かせる。
- 教室以外の場所で考えられる危険や、その危険から逃れるためにはどうしたらよいかを考えさせる。
- 「ものが落ちてこない・倒れてこない・移動してこない」場所に避難することを理解させ、今後の避難訓練や地震発生時にその視点で行動できるようにさせる。

エ 指導過程と児童の実際の様子

- 導入では様々な地震の経験を引き出し、めあての提示、設定をスムーズに行うことができた。
- 児童はこれまでの訓練から、災害時における避難行動について理解していた。その上で休み時間に大地震が起きた場合の避難行動を考えるという学習の流れを作り出すこととした。



【普段いる場所を思い出す様子】

- 図書室、運動場、廊下とグループごとに場所を1つに絞って考えさせた。児童はじっくりと考えることができ、内容からも逸れずに話し合うことができた。
- 「運動場では、上に何も無い芝生の所に逃げる」、「廊下にいる時は探検ボードで頭を守る」等の意見を述べ、現実的な問題としてイメージして考えさせることができた。



【班での話し合いの様子】

- 各グループの発表を受けた後に、児童の意見交換の場を設定する必要がある。そうすれば、運動場（屋外）に出るといった次の避難行動に繋がっていったと考えられる。
- 教室以外の場所での被災を想定した話し合いのまとめを通して、危険な場所からの避難の仕方を理解させることができた。



【避難行動を確認する様子】

オ 考察

- 授業後の自己評価では、「校内の様々な場所にどういう危険がありましたか。」「地震が起きたときにどのように身を守ればよかったですか。」というどちらの項目に対しても、全員が「よくわかった」、「わかった」と答えていた。小・中学校で共通した防災の視点の提示が効果的だったと考えられる。
- この学習の数日後に行われた避難訓練では、「落ちてこない・倒れてこない・移動してこない」を意識しながら避難できた児童が多かった。訓練に以前より緊張感をもって取り組むことができた。

(2) 中学校における実践(学級活動) 高鍋西中学校2年生

ア 題材名 地震の際に身を守るためには

イ 本時のねらい

- 校内で起こりうる危険を予測し、自分の身を守るための適切な行動を考えることで、実践的な力を身に付ける。

ウ 防災学習の視点

- 事前に、安全な避難経路を考える視点を与え、それぞれの場所の特性を考慮した行動の必要性を理解させる。
- 揺れが収まった後の避難場所への避難経路の安全が確保できているかを多角的に検証させる。その際に、タブレットの動画を参考にさせる。
- 日頃から安全の確保に備えること、災害時の危険を想定することの重要性を確認させる。

エ 指導過程と生徒の実際の様子

- 緊急地震速報を用いた避難行動を模擬体験させることで、生徒の興味・関心を喚起させることができた。しかし、瞬時に避難行動がとれなかったため、継続的な実践が必要だと感じた。
- 避難行動の模擬体験や東日本大震災の画像を踏まえ、学習課題を生徒主体で設定することで、本時の流れを生徒が理解することができた。
- 命を守る防災の視点が書かれた巻物を参考に、リーダーシップ・メンバーシップを発揮し、意欲的に話し合いに取り組む姿が見られた。
- 教材の工夫により、個人の意見が班の意見に反映され全体への発表材料となることで、言語活動の充実が図れた。
- 校内を動画撮影したタブレット端末を用いるなど、グループで検証する際の資料を効果的に提示することで防災の視点を踏まえて、避難経路の安全を多角的に検証することができた。タブレット端末は、個人思考の場面においても、補助教材として活用すると、より効果的だった。
- 考えを共有する場面では、すべての班が、防災の視点を根拠とした、避難経路を発表することができた。
- 東日本大震災を題材にした絵本『かぜのでんわ』の読み聞かせを行うことで、「大切な命」だからこそ「自分の命は自分で守る」という考え方も身に付かせることができた。

オ 考察

- 授業後の自己評価では、「地震発生時にどのように身を守ればよいかわかりましたか。」「ポイントを意識して、適切避難経路を選択することができましたか。」というどちらの項目に対しても、全員が「達成できた」という結果になり、4段階評価のうち、1つ目の項目が84%、2つ目の項目が65%の生徒が最高評価をつけた。小中学校で共通した防災の視点の提示が効果的だったと考えられる。
- 「命を守る」・「命をつなぐ」防災の視点で避難マップを考えさせ、最後に『かぜのでんわ』の読み聞かせを行うことで、防災教育で身につけたい力である「防災対応能力」の向上だけでなく「生きる力」の育成にもつながるように心掛けた。
- 授業後の感想に、「地震速報時に一瞬戸惑ってしまった。この戸惑いが命を落とすことにつながるのだと感じた。」「避難マップ作成では、命を守る防災の視点で日常をみると、私たちの周りには危険な場所がたくさんあることがわかった。二次災害についてもしっかり考えていきたい。」というものがあつた。今後の防災教育において「生きる力の在り方」の視点の必要性を感じた。



【防災の視点を確認する様子】



【避難経路を話し合う様子】



【避難経路を発表する様子】

3 防災訓練（避難訓練）等の充実

(1) 地震津波を想定した防災訓練（避難訓練）等の現状

全小・中学校で町指定の避難場所（高鍋農業高校第2グラウンド）までの避難を想定した避難訓練を実施した。時間的な制約もあり、学校によっては途中までの避難とした。

各学校では、学校の立地条件等に応じた防災訓練が計画され、危機意識をもって児童生徒への指導がされ、避難方法の工夫・改善が図られてきた。

本研究所では、宮崎地方気象台の出前講座で研修した緊急地震速報を取り入れた訓練の実施を勧め、児童生徒の地震発生時の対応を速め、被害の軽減を図るための取組とした。

(2) 小・中学校等の連携

ア 高鍋東小・高鍋東中の合同避難訓練

本年度当初、両校では合同の地震・津波を想定した避難訓練を検討していたが、期日や安全確保等の面から実施には至らなかった。次年度は、合同ではなくても、同じ日程で避難訓練を実施するなどの計画の検討も必要である。

イ 高鍋東小・高鍋高校の合同避難訓練の実施

両校では、合同避難訓練を10月31日（金）に実施した。高鍋農業高校第2グラウンドへの避難の際に、高校生が小学生を励ましたり、けが人をリヤカーで搬送したりするなど、高校生が力を発揮する姿が見られた。



小・高合同避難訓練の様子

ウ 地域との連携

各学校の地震・津波を想定した校外への避難訓練をする際、町ライオンズクラブや高鍋警察署員による、児童生徒の安全確保に協力があつた。路地の多い県道を通行する際に車の有無を知らせるなど、学校職員とともに避難訓練を見守る支援であつた。

エ 町小・中学校防災主任会との連携

今年度発足した防災主任会で、本研究所の活動を周知し協力を依頼した。具体的には、各小・中学校の避難訓練の実施の日程検討や、「学校防災の日」を共通実践として取り組むこととした。また、指導内容に関することにもふれ、地震の際の初期対応として、「物が落ちてこない・倒れてこない・移動してこない場所に。」を再確認していくようにした。

(3) 学校防災の日の設定

過去に大きな自然災害が発生した9月1日、1月17日、3月11日を基準日とする「学校防災の日」を町内4校共通で設定した。また、共通実践としてミニ防災訓練をすることとした。その内容は、朝の会などで校内放送を利用して緊急地震速報と地震の揺れの効果音を放送し、児童生徒及び職員が机の下に入るなどの避難行動をすることとした。

その際に使用する効果音のCDは本研究所で作成し、各学校に配付した。このCDは、一般のラジカセ等で再生できる音声音源をCDにし、各学校の避難訓練や防災に関する授業でも活用された。

4 学習環境整備

(1) 広報活動「ふるさと学習通信」発行

ア 目的

本教育研究所では、研究内容や取組を家庭や地域に広く知らせるために、高鍋町内小・中学校の児童生徒の全家庭に向けて「ふるさと学習通信」を配付した。この「ふるさと学習通信」には、研究内容の地震・津波災害に関する防災教育を中心に研究実践の様子及び、「家族防災会議」に向けた資料などを分かりやすく掲載した。

イ 発行方法

研究会の中で、掲載内容やレイアウトを検討し、原稿の作成や校正を進めて、10月から1月まで毎月発行してきた。

ウ 内容

- 高鍋教育研究所の研究テーマの紹介、高鍋町「みんなの防災手帳」の紹介
出前講座の講話の一部「知ってほしい津波の恐ろしさ」
- 「釜石の奇跡」「津波てんでんこ」「開こう！家族防災会議」に向けて
- 小・中学校における「防災教育に関する研究授業」
- 「防災教育に関するアンケート調査」より

エ 考察

- 防災の必要性は通信を通して伝えることができたが、家庭や地域からの反応を知り、次に生かせるとよい。
- 関心をひく材料となったが、定着までいっていない。
- 4校の防災教育の取組を知ってもらえてよかった。
- 内容の充実した紙面になったが、大人向けの記事と子ども向けの記事もあるとよかった。
- たくさんの資料などが盛り込まれていて、レイアウトも工夫されていた。

ふるさと学習通信


平成26年10月 No. 1
発行：高鍋町教育研究所

高鍋町教育研究所とは…
高鍋町内の小中学校4校それぞれから2名ずつの研究員が集い、昨今の社会情勢や本町の児童生徒の実態に基づいて、今後どのような教育をしていくことが有効なのかを研究する機関です。
月2回程度、水曜日の夕方に実施しています。学校という枠を超え、高鍋町に住む子どもたちの健やかな成長を願って、防災教育に関して、今私たちに何ができるのかを真剣に協議しています。

本年度の研究テーマ

主題「地震・津波災害から命を守り、たくましく生きる児童生徒の育成」
副題～防災教育の指導計画の充実を図り、主体的に行動する力を育てる指導を目指して～

『みんなの防災手帳』はご覧になりましたか？
本年度、高鍋町内の全世帯へ『みんなの防災手帳』が配布されました。この手帳は、東日本大震災後に東北大学災害科学国際研究所（宮城県仙台市）が考案した手帳です。手帳を導入したのは、宮城県多賀城市（約25000世帯）に次いで本町（約9000世帯）が全国2例目だそうです。今年の秋には、岩手県沿岸自治体の約10万世帯にも配布されるということです。東日本大震災の教訓から考案された最新の防災情報が詰まっています。今後、起こるであろう南海トラフ巨大地震に向け、しっかりとした備えをしていきたいものです。
手帳の冒頭には、9月19日に本町美術館でご講演いただいた作成者の熱いメッセージが書かれています。
『この手帳は、災害時、もっとも危険な発災から10000時間を推定して作りました。具体的に、実践的に、あなたの中にある「生きる力」をサポートしていきます。』（東北大学災害科学国際研究所 教授 今村文





←

『みんなの防災手帳』の構成

序章	我が家の防災手帳	
第1章	発災前	『生きるための備え』
第2章	発災～10時間	『命を守るために』
第3章	10～100時間	『生き伸びるために』
第4章	100～1000時間	『生きぬくために』
第5章	1000～10000時間	『よりよく生きるために』
第6章	各自自治体情報	

専門家を招いた研修会を行いました
8月1日に実施した「高鍋町小・中学校教職員研修会」では、宮崎地方気象台の甲斐朝樹（よしろう）先生を招き、『地震と津波…その災害と情報の利活用について』と題して話をさせていただきました。東日本大震災時の映像をもとに、地震津波の恐ろしさや今後起こるであろう南海トラフ巨大地震の被害想定、命を守るための避難、防災訓練の取組について、貴重な話をしてくださいました。





(2) 「開こう！家族防災会議」資料

ア 作成目的

本教育研究所では、高鍋町の小・中学校に通う児童生徒のいる家庭での家族防災会議の必要性を考えた。地震・津波の発生に備え、防災意識の高揚を図るとともに、地震・津波から自らの命を守り、家族が無事に避難することを目指し、家族で防災について話し合うための資料を作成する。

イ 配付方法

本研究所が作成し配付した「ふるさと学習通信」に「家族防災会議」の重要性を書き記し、その後、「家族防災会議」を開いてもらうように働きかけ、各学校の児童生徒に配付する。(1月に配付)

ウ 活用方法

「家族防災会議」を開き、地震が起きた時どこに避難するのか、どのように連絡をとり合うのか等について話し合ったことを、用紙に書き込み、家族の目につくところに貼っていつでも確認できるようにする。

エ 内容

- ① 地震が起きた際、家からの避難場所の確認をする。
- ② 地震が起きた際、自分の避難場所の確認をする。
- ③ 地震が起きた際、家族の避難場所の確認をする。
- ④ 地震が起きた際、緊急連絡先の確認をする。
- ⑤ 非常持ち出し袋の準備と持ち出し方を考える。

オ 紙面紹介

『津波でんでんこ!』を家族みんなで実行する 発行：高鍋町教育研究所

開こう！家族防災会議

会議をした日 月 日 名前 ()

○ 地震が起きて、津波が来るという想定のもとで、話し合ってみてください。
○ 話し合ったことは、この表にまとめて、家のよく見える所にはっておきましょう。

①地震が起きた際の家からの避難場所を確認しましょう。
下の例を参考にして、家からの避難場所を書きましょう。

～例～ 我が家は 高鍋農業高校第2グラウン へ避難する。

我が家は へ避難する！

②地震が起きた際の自分の避難場所を確認しましょう。
学校や家以外の場所で地震があったらどこに避難しますか？
想定1 昼下校中、想定2 家や学校以外でよくいる場所、想定3 習い事等の場所からの避難場所を書きましょう。

～例～ スポーツ少年団 活動中に 町体育館 で起きたら 津波避難ビルの「フェリスタ舞鶴」の屋上 へ避難する。

想定1 登下校中 に起きたら へ避難する。

想定2 で起きたら へ避難する。

想定3 で起きたら へ避難する。

③地震が起きた際の家族の避難場所を確認しましょう。
家以外にいる時(仕事中等)の家族の避難場所を書き込んでみましょう。

～例～ (お母さん) は 津波避難ビルの「ホテル四季亭」の屋上 へ避難する。

家族1 () は へ避難する。

家族2 () は へ避難する。

家族3 () は へ避難する。


家族4 () は へ避難する。

一人で避難できない家族がいたら、その人の想いを聞いてあげられるといいですね。

④地震が起きた際の緊急連絡先を確認しておきましょう。
避難場所からの連絡先(2つ)を確認しておきましょう。

緊急連絡先	①
	②

⑤地震が起きた際の非常持ち出し袋を作りましょう。
以下の例を参考にして、非常持ち出し袋を作ってみましょう。その他に必要な物はありますか？




- 飲み水
- 食べ物
- 乾菜類
- お金
- メモ帳と筆記用具
- ティッシュペーパー
- タオル
- かいちゅう電灯
- 電池
- ラジオ
- スニーカー

①持ち出し袋は、いつでもどこに置いてありますか？

②だれが持ち出しますか？

災害はいつ起こるか分かりません。早めにつけておきましょう。

高鍋町が配布している「みんなの防災手帳」もぜひ参考にして、家族会議をしてみましょう。



VIII 研究の成果と課題

1 研究の成果

- 2年間の防災教育の研究で、防災教育への意識の向上が図られ、使命感を持って研究を進めることができた。今年度は、高鍋町小・中学校の防災教育の手引き書作成の過程を通して、指導法や資料について研究し、全体構想の中に防災学習の視点を位置づけることができた。
- 講師を招聘しての研修は、教職員の危機意識を高め、防災教育の必要性を実感する場となった。地震・津波災害で起きる津波の速さなど具体的な数値を提示され、改めて防災教育の重要性を感じ、授業や避難訓練に生かすことができた。
- 防災学習の視点を取り入れた授業実践で、地震の初期対応として、「物が落ちてこない・倒れてこない・移動してこない場所へ」を、町内の共通指導内容として提示することができた。
- 各学校で行われてきた学校行事の地震・津波想定避難訓練に加えて、「学校防災の日」を年3回設定し、児童生徒に震災の記憶を忘れさせない取組ができるようになった。
- 家庭や地域に向けての広報活動として「ふるさと学習通信」を発行し、「開こう！ 家族防災会議」資料を作成し、家庭で防災について話し合うためのきっかけを作ることができた。

2 今後の課題

- 防災教育は、各学校の年間指導計画によって、計画的、継続的に進める必要がある。本研究所での取組を共通実践するため年間指導計画の改訂など各学校の協力体制が不可欠である。
- 研修は、理論的な内容ばかりでなく、先進地域や先進校の実践について学び、交流を深める機会があるとよいと思われる。
- 研究授業の成果を生かして広めたい。防災に関する授業で、指導者は指導内容を通して何を押さえ、どういう流れで児童生徒に考えさせるのかを見通すことが必要である。
- 防災訓練では町内の小・中学校の連携を図り、避難訓練を一斉に計画するなどの取組も考えられる。また、隣接する幼稚園・保育園や高校との連携についても考える時となっている。
- 町内の教職員や家庭への啓発は、まだ不十分であるので、さらに各学校で防災教育の在り方を見直し、防災学習や防災訓練の充実を図る必要がある。

【引用・参考文献】

- ・ 学校防災マニュアル（地震・津波災害）作成の手引き 文部科学省
- ・ 学校防災マニュアル（地震津波災害）作成例 岡山県教育委員会
- ・ 津波災害に伴う安全対策マニュアル指針 宮崎県教育庁学校政策課
- ・ 釜石市津波防災教育のための手引き 岩手県釜石市教育委員会
- ・ ～みやざきっ子の命を守る～宮崎市防災教育手引書 宮崎市教育委員会
- ・ かどがわ黒潮学習の手引き 門川町教育委員会
- ・ 高鍋町立学校防災マニュアル（地震津波災害）作成例 高鍋町教育委員会
- ・ 高知市地震・津波防災教育の手引き 高知市教育委員会
- ・ 宮崎県防災教育資料集 宮崎県教育委員会

【研究同人】

所長	島埜内 遵				
研究指導員	幸丸 義信				
研究員	三輪 宏一	中藤 久美子 (高鍋東小)	黒木 貴光	徳丸 岳 (高鍋西小)	
	満安 辰郎	兒玉 径 (高鍋東中)	橋口 俊幸	後藤 由紀 (高鍋西中)	